

VII 家庭・地域の立場から

1 家庭の中で

子供たちの寛容の心を育てる場は、幼稚園・子供園や学校だけではない。学校より多くの時間を過ごす家庭や地域では、より直接的な影響を受ける。子供たちにとって一番のお手本は、家庭や地域における保護者をはじめとする大人の考え方や言動である。そこから子供たちは自分自身の中に「寛容の心を持つ」とは何かを実感し、その基準を見つけていくのではないだろうか。

例えば、学級に外国籍の子供が転入して来たとしよう。子供の報告を聞いて、その時保護者としてなんと答えるだろうか。あるいは、学童保育に、発達障害でじっとしていることができず、他の児童にうるさくつきまとう子供がいるとしよう。その時保護者としてどうするだろうか。または、毎日のようにテレビ番組に登場するLGBTかもしれない人達を見て、保護者としてどんなリアクションをし、子供たちに説明しているだろうか。

子供と一緒に生活する大人が、一般社会で出会う多様な人たちを自分たちと同じように受け入れているということが、子供にとって、寛容の心を知る最大の指針となるはずである。子供たちは言葉にはしなくても、いつも保護者の言動を見ている。特に、思春期が近くなり、自分と他者、社会の中の自分を意識し始めると、保護者の言動を批判的に見るようになり、まわりの大人の反応を確かめようとする。そのときに、大人自身が多様な人たちについての正しい知識や考え方をもち、自分の生き方の中で受け入れているかということが問われるだろう。大人としての私たち自身が寛容の心をもっているか、と自問していきたい。

家庭は、子供にとって、緊張から開放され、自由な気持ちで思うことができる場所である。たとえ叱られても、失敗して落ち込んでも、最後には温かい愛情で救われることが分かっている安心で安全な場所である。だからこそ、寛容の心という、複雑で、身に付けることが難しく、一つの正解があるわけでもない心の発達を、保護者はじっくりと育てていく姿勢を持っていたい。できないからと言って否定するのではなく、その心を受け止めて、型にはめず、日頃の会話や大人の行動から身に付けることができるように促したい。子供の心の発達は、個人差があり、また、ゆっくりと進んでいくのであるから。

2 地域の中で

子供たちは、家庭を取り巻く地域の中でも多くの時間を過ごす。小さな社会であるが、学校や家庭で得た知識や情報を確認し、自分の中で深めて、将来出て行く多様性に満ちた社会を勉強する場所である。

昔は、近所に異年齢で遊ぶ集団があり、商店街やお祭りで大人の世界を覗いたものであるが、いまやその機会も少なくなっている。現代は、地域のスポーツチームや放課後子供教室、自治会や育成団体主催の地域祭りなどがそれにあたるのだろう。そこで、年長者の

小さい子供に対する思いやりを見たり、自分自身が手助けされたり、逆に年長者に無条件に叱られたり、不寛容な扱いを受けたりするかもしれない。そんな小さな体験の積み重ねから、寛容とは何かを学んでいってほしいと思う。小さな頃から、多様な人たちの中で生きることが、将来の生き方に反映されるのではないだろうか。

ただし、ここでも、寛容でなかったことを叱り、できないことを責めるのではなく、広い視野から子供たちの発言や行動に対する意見を言い、温かく見守る大人たちがいることが重要である。自分が他人から認めてもらった経験を重ねることで、心が強くなり自信ができ、寛容を理解できるようになるのではないだろうか。

子供の心の背景は千差万別であり、虐待や貧困などの家庭状況、精神的な発達の数値などにより、寛容を理解できず、実践が難しい子供たちもいるだろうが、私たちは、その子供たちも同じ社会の一員として受け入れることのできる懐の深い地域でありたいと思う。

3 家庭・地域の変化

しかし、子供たちを手厚く育むことのできる家庭や地域が、今、どのくらい存在するのだろうか。

保護者の状況はというと、経済格差が広がり、生活の維持だけで手一杯の家族が増え、貧困・虐待が問題となっている。母子家庭や父子家庭も増加し、経済的には問題がなくても、地域で相談したり頼ったりする相手は少なく、孤立した子育て、つまり親だけの知識と経験に頼る子育てにならざるをえない。だが、その保護者もまた核家族の中で育ち、子育てについて多く体験しているとは言えないだろう。その上、人の繋がり方として大きな力を持つようになったSNSが、逆に文字情報にのみ頼る不安定な人間関係を生み出しているように思えてならない。

さらに、家庭を支えるはずであった地域の教育力が希薄になり、衰えてきたと言われて久しい。数十年前は、遊びに行った家でご飯をごちそうになったり、鍵など持たせなくても、学校から帰って親がいなければ、ご近所が待たせてくれたりした。母親が病気で寝込めば、食事を届けたり、子供の送り迎えをしてもらったりもした。こうして支え合うことは、当たり前の「お互いさま」の行動であったはずである。ところが、このような「お節介な」行動は減ってしまい、お互い距離をとって踏み込まず、「迷惑をかけない」ことに親子で気を遣っているように見える。公園でもたくさんの親子が遊びながら関係を作り、子育ての先輩から教えられていたが、少子化も手伝って、最近の公園には一組だけの親子が目立つように思える。

かつて日本人は、信頼できる集団の中で安心して子育てをしてきたはずである。しかし最近の社会的弱者に対する本音むき出しの圧力、盲導犬や白杖に対する嫌がらせ、車内のベビーカーへの批判などが報道され、実際に暴力に繋がることがある。だとすれば、子供という弱い存在を抱える親は、自分たちを守るために、軋轢を生まないよう必要なことを主張せず、萎縮していくのも無理はない。マタニティマークをさらに小さくして欲しいとい

う女性たちの希望は、その表れにほかならないだろう。

グローバル化に対応するために、強く自己主張することが必要であり良いことされる風潮があり、些細なことや批評の対象にすらならなかったことが、一旦ネット上で取り上げられると、誹謗中傷を受けることがある現代、そもそも苦勞して、相手との対話を繰り返しながら人間関係を作ることの少なかった若い世代は、自分の周りの小さな世界がうまくいけばそれでよいと考え、問題が起こらない限り、他人との関わりを積極的に望まないのではないだろうか。

さらに、悩み事の受け皿であった自治会・町会・子供会等の数は減り、新しい地域ではこのような組織が生まれることも少ない。組織としては、PTAが唯一残るところであるが、運営方法についてバッシングを受けたり、女性の就労が増えたりして、積極的には参加しなくなっている。そうすると参加することの本来の意義が伝わらなくなり、学校を支える組織として、また子育てネットワークの中心としての役割を果たす力が弱っているように感じる。

4 地域における新しい取り組み

このような状況を踏まえ、現代は、失われた人間関係を再構築し、意図的に繋がりをつくる時代になった。そうしなければ、子供たちの健やかな育ちを保証できないのである。行政も危機感を持ち、多くの自治体で、小中学校に学校校運営協議会や地域支援本部を置き、地域コーディネーターを配置して、地域や学校外の人材を学校に取り込み、子供たちに様々な体験の機会を増やし、学校・保護者・地域を繋ごうとしている。

例えば、昔ながらのお祭りのない地域では、学校運営協議会や青少年健全育成団体が地域のお祭りを主催しているところがたくさんある。ある中学校では、生徒たちがテントの設営などの準備や模擬店の手伝いをし、生徒会が古本を集めて売って募金活動をしたり、家庭科部が作品の販売や小学生に手芸体験をさせたりしている。自分がお祭りを楽しむのではなく、裏方として人のために一日働く経験をする。同じ作業の繰り返しであったり、うまくできなかつたりもするだろう。だが、家族以外の大人に混じって、来場する小学生や地域の人を楽しませるために、一生懸命に指示を聞き、緊張しながら働くことは、終わった後で大きな達成感を味わうことができるだろう。また、大人が子供たちのために懸命に、また楽しそうに作業する姿を見ることは、生き方のお手本でもある。実際生徒たちは、嬉々として作業に取り組み、多くの生徒が来年もやりたいと言って帰っていく。

地域コーディネーターもまた大きな力を発揮し、その熱意と尽力もあって、今学校には様々なボランティアが入るようになって来た。例えば、キャリア教育の講師として、地域の看護師や建築士の方々を捜して来てもらったり、放課後子供教室に、大学生やリタイアした方々にボランティアに来てもらい、将棋の相手をしたり勉強を見てもらったりすることもある。さらに学校支援をしたい企業やNPOと連携し、授業に入ってもらえることもある。

また一方では、直接、家庭を支援するために、各地で家庭教育支援チームが立ち上がり、行政と一緒に熱心な活動が続いているし、危機感を持った人たちが立ち上げた「こども食堂」や無料の塾も数多く活動している。最近では、児童館だけでなく、図書館も子供たちの「サードプレイス」(家庭や学校に続く第三の居場所としての地域)としての役割を考えた活動をしている。

こうした活動を通じて、子供たちがたくさんの大人と接し、心ある人たちと一緒に、身体だけでなく、心をケアし耕す経験が、ますます増えていってほしいと思う。

5 これからのPTAのあり方

そして、このような活動が目立つようになった中で、保護者の組織としてPTAにも他人任せにしない、元気な活動を期待したい。PTAは、学校のお手伝いが本来の目的では決してない。教員と保護者がつながって、子供の話を率直にできる関係をつくり、保護者に学校での教育を知ってもらい、学校には保護者の思いを伝えて、協力して一緒に子供を育てる力を強くすることが、すべての活動の根底にあって欲しい。そのためには特別に派手な活動をする必要はなく、日頃の活動を誠実にやり、学校に保護者が出向き、先生や他の子供たちを見るチャンスを増やすことができれば十分である。

小学校であれば、入学後の保護者も学校生活が分からなくて不安な時期に、クラスの茶話会やベルマーク運動、読み聞かせの会などを開くことで、保護者同士が知り合いになり、世話役の先輩保護者や担任の先生の話聞くことで、小学校生活について早く理解する手助けになる。中学校であれば、ガーデニングや図書ボランティアなどできるだけ多くの人が、抵抗なく学校に来るチャンスをつくり、保護者会や学校公開に来ることを後押しする活動で、教育活動を見てもらいたい。さらにPTAは地域住民でもあるため、保護者と教職員・地域住民、保護者同士をつなぐ拠点となり、子供たちを取り巻く縦・横・斜めの関係を厚くすることが、大切な役割である。保護者の悩みや不安を減らし、「モンスター」を生まない土壌を作るだろうし、保護者自身の人間としての育ちを促すことにもなる。そのためには、学校が開かれていて、PTAを大切に育てる姿勢を持っていることが大前提である。

もし、以上のような直接的な支援ができなくても、私たちは地域の大人として、近所の子供や通りすがりの子供たちを気にかけて、挨拶やほんの少しの声かけで関わることで、つまり大人としての当たり前の対応で、その育ちを支えることができることは当然である。

6 最後に・・・社会は

ところが今、子供や老人、障害者に関わる施設の建設に強い反対が起こったり、多様であることそのものが否定されたりするような悲惨な事件が起こっている。世界に目をむけても、不寛容な空気に満ちている。そういう時代であるからこそ、私たち大人は流される

ことなく、「足元の暮らしの中に目を転じ」、少数派や外国人らへの「寛容という勇氣」（朝日新聞 2016. 9. 11 社説）を持っているか自問していたいし、家庭や地域では自信を持って子供に寛容であれと伝えたい。子供たちには多様性を自然体で受け入れ、寛容な心を持つような大人に育ってほしい。

いじめは、不寛容の最たるものである。残念なことに毎月のように深刻ないじめが報道され、途切れることがない。最近では、福島から避難してきた子供たちへのいじめが多数発覚した。すでに心に傷を負っている子供たちに追い打ちをかけるようないじめに憤りを感じると同時に、なぜ周りの大人たちが早く発見し阻止できなかったのか、と強く思う。いじめが生まれてくる背景は様々あるが、近くの大人の心にある不寛容の反映もその一つであろう。いじめは、大人の世界でもパワハラ、セクハラなどに形を変えて、人の尊厳を傷つけている。私たち大人が、他人を思いやって受容し、寛容の心を表さなければ、子供達に理解させることはできない。

社会は多くの人々の力で成り立っている。その一員として、家庭でも地域でも、先に示されたような、各校種の教育現場で行われている実践を無駄にしないように、学校を知り学校と同じ方向を向いて、子供たちの心の育ちを後押しして頂きたいと思う。大人たちが、育てようと思わなければ、寛容の心は育たないのではないだろうか。

寛容とは、哀れみや与えることでは決してないはずである。相手を認め、同じ社会に生きる人間として尊重しあう基礎になるはずである。私たちと一緒にいる様々な人たち、年齢・性別・国籍の違い、障害を持つ人、性的少数者、さらには、隣に座っている友達の存在をあるがままに受け入れ、子供たちが学校をはじめ、家庭や地域の様々な場で寛容の心を育み、これからの変化と多様性に満ちた社会を生き生きと乗り越えていってくれることを期待したい。

《参考図書》

- ・ 本田由紀 『社会を結びなおす—教育・仕事・家族の連携へ』（岩波ブックレット）2014
- ・ 星山麻木 『障害児保育ワークブック』（萌文所書林）2012
- ・ 木村泰子 『「みんなの学校」流 自ら学ぶ子の育て方』（小学館）2016
- ・ 住田正樹編 『子どもと地域社会』（学文社）2010
- ・ 公益社団法人日本PTA全国協議会 『PTA90 事例』（ジアース教育新社）2016